

# まいにち イタリア語

*italiano*



インターネットで番組が聴けます!

NHKネットラジオ

らじる★らじる

新作 初級編 10月~3月/月曜~水曜 講師 森田 学

サンタとグイードの物語 La storia del Palazzo delle Rose

新作 応用編 1月~3月/木曜・金曜 講師 富永直人

インタビューで学ぼう! イタリア語 Ascoltiamo con la penna in mano!

CDは別売です。



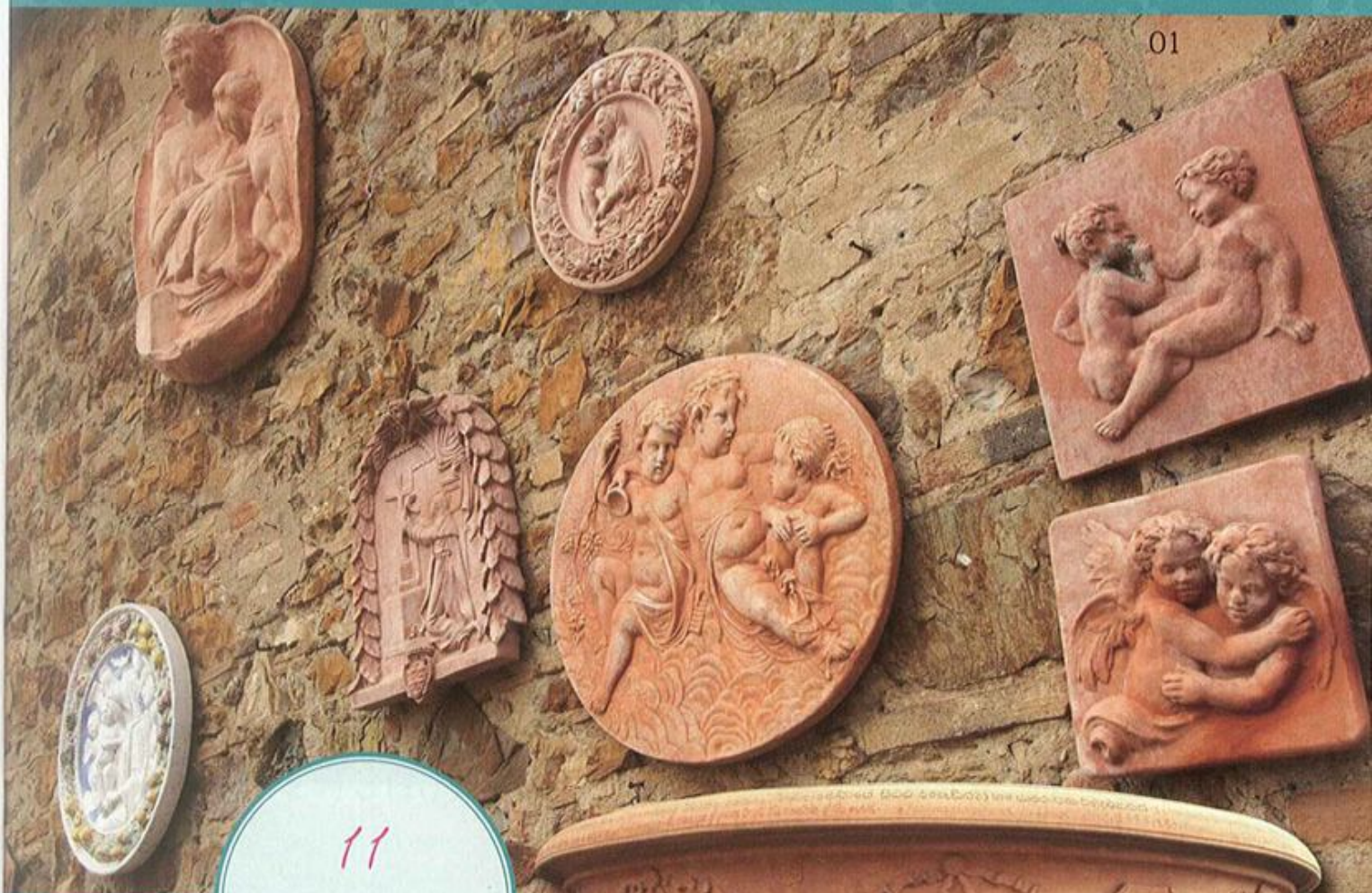
「アンコールまいにちイタリア語」のテキストは別売です。



# イタリア工房探訪

文・写真／大矢麻里 Mari OYA

01

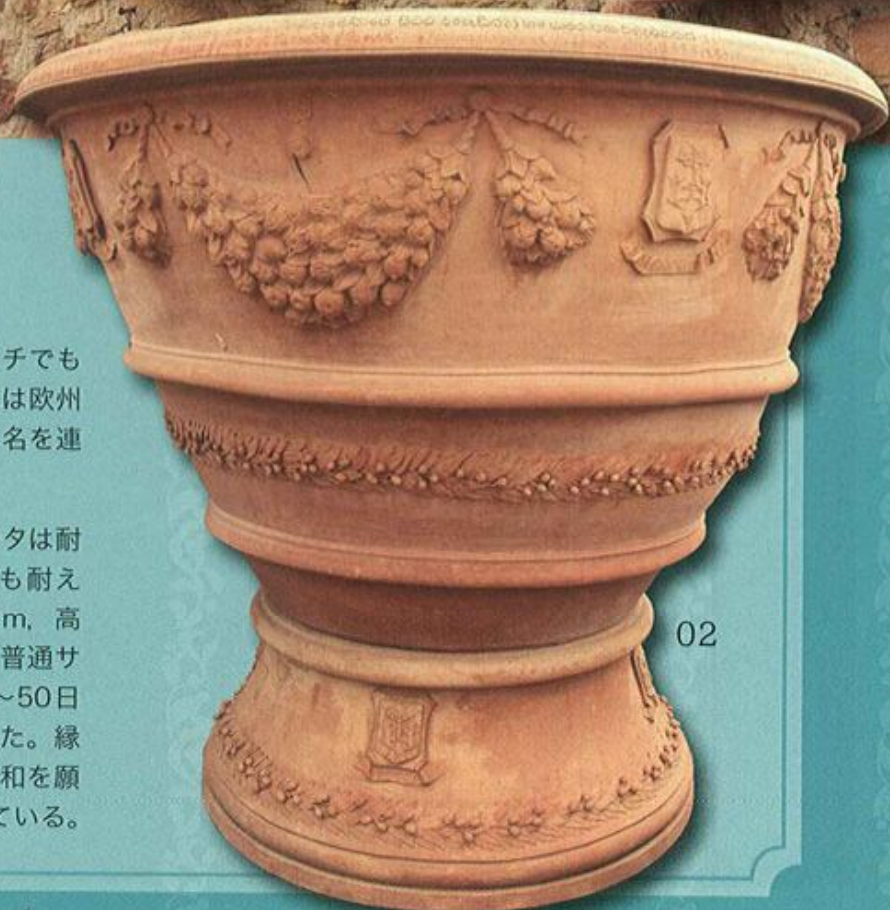


11

## テラコッタ工房

- 01 工房兼直売所のアイキャッチでもある壁飾り。顧客リストには欧州各国の著名建築家や貴族も名を連ねる。
- 02 インブルネータ産テラコッタは耐寒性に優れ、零下30℃にも耐える。巨大な壺の口径は2m、高さ1.7m、重さは650kg。普通サイズの壺の制作期間が40～50日のところを、約半年間要した。縁にはさまざまな言語で「平和を願う」とメッセージが刻まれている。

02

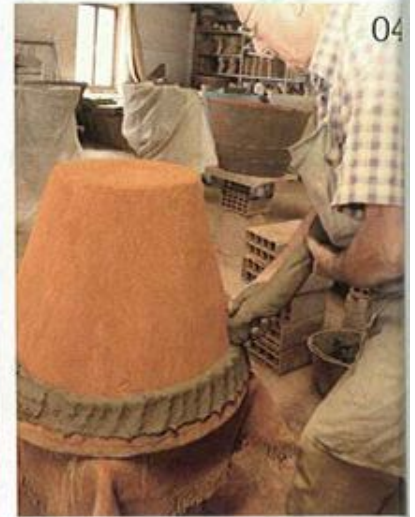






03

03 11人いる職人の長であるアンジェリーノさん。横に積まれた粘土の山から少しずつ取り分けて棒状に捏ねる。



04

04 原型に粘土を巻き付けてゆく。その速度は意外に速く、カメラが追いつかないほど。

05 原型から外したところ。赤茶色に見えるのは、剥がれやすくするために振りかけた土が付着したため。内部に粘土を巻きつけた跡が確認できる。



05

06 鉢飾りには、生命力の象徴である果物や花をモチーフとした『フェストーネ』がよく用いられる。その上には、工房とインプルーネータ職人組合の刻印が押されている。



06



# イタリア工房探訪

11

## テラコッタ工房

文・写真／大矢麻里 Mari OYA

イタリアという国は、どこをどう切り取っても憎らしいほど絵になる景色で溢れている。空の旅で機上から見下ろす長靴半島もまた魅力的だ。「花の都」フィレンツェ空港に近づき、機体が大きく旋回しながら高度を下げ始めると、遠くに赤茶色をした煉瓦造りの町並みが見えてくる。アルノ川を辿りながら視線を移動すれば、大聖堂のクーポラも捉えることができる。イタリアの人々が自国をベルパエーゼ(Bel Paese=美しい国)と呼ぶことに、同感せずにはいられない風景がそこにある。

ルネッサンスの中心地として繁栄を極めたフィレンツェの建築に、かつて大きく貢献した村があった。中心部の南約10kmに位置するインプルネータである。この地で採れる良質な土は古代ローマ以前のエトルリア時代から知られ、村はテラコッタ(素焼き製品)の産地として発展した。1308年にはすでに職人ギルドが存在したという。

ルネッサンス期に入るとフィレンツェの発展に伴い、瓦や煉瓦などの需要が高まってゆく。インプルネータの土から作られたテラコッタは耐寒性に優れ、建築資材に適すると専門家たちによって評価されたからだ。建築家フィリッポ・ブルネレスキもそのひとりだった。彼はサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のクーポラ建設に、インプルネータから煉瓦を調達している。その数なんと400万個。職人たちは誇らしさで胸をいっぱいにしなが、朝から晩まで煉瓦を焼き続けた。ちなみにそうした忙しい作業のなかでペポーゾ Peposo というインプルネータのご当地料理も誕生している。牛肉に赤ワインとたっぷりの胡椒を加えた料理で、煉瓦を焼く窯の隅で煮たのが始まりだ。

さて今回は、伝統的製法を守り続けるテラコッタ工房『ポッジ・ウーゴ』を訪ねた。4代目にあたるロレンツォさん(49歳)が一番に案内してくれたのは、すでに13世紀には存在したという、工房裏の土採掘場だった。テラコッタと聞いて、私は勝手に赤い粘土質の土を想像したのだが、目にしたのは砂状の灰色の土だった。「この土を



工房を切り盛りする4代目のロレンツォさんと姉アントネッラさん。「16世紀には村に100軒近くあった工房は、今日わずか9軒残るだけです」。



インブルネータ市から受注した壺に貼る飾りを製作中。市の紋章を細部まで忠実に再現する。



燥させてから機械で粉碎し、水を  
えて粘土状にします。土の色がどう  
化するかは、あとでお見せしましよ  
。彼について工房に入ると、この  
80年というアンジェリーノさんが  
を製作中だった。その日行われて  
たのは、いくつかある鉢の製法のひ  
ついで、グッショ (guscio = 殻) とい  
手法だ。1. 粘土状になった土を太い  
状にまとめる (口絵 03)。2. 表面に  
茶色の土 (粘土の原料と同じ灰色の  
を焼いたもの。型から剥がれやすく  
る) を振りかけた原型を置く。3. 工  
場で用意した棒状の粘土を原型に巻  
つけてゆく (口絵 04)。4. 粘土です  
て覆ったら原型から外し、2日間乾  
かせる (口絵 05)。5. 開口部の縁や  
ストラインにも粘土を重ね、表面を  
らかに整える。別に作っておいた装  
飾を貼り、約15日間乾燥させる (口絵  
06)。6. オープンに鉢を入れ、2日間  
かけて温度を少しずつ上げる。900  
1000℃に達したら火を消し、今度  
2日間かけて冷ます。サイズにもよ  
るが、その後の乾燥期間も加えると、  
乾燥期間はおよそ40~50日を要する。  
取り出した鉢は、まさに  
茶色! 灰色から赤茶色へと  
変色していた。「焼きあげるこ  
うに焙じられる豊富なミネラルと  
その赤味を生み出すのです」。  
アンジェリーノさんによれば、工房の  
歴史の試練があったという。  
インブルネータ市を襲った  
地震で工房に大きな被害をもた

らし、当時の  
持ち主は工房  
の継承を断念せざるを得なかった。  
1919年、そこを買い取って再び操業  
に漕ぎつけたのが、ロレンツォさんの  
曾祖父である初代トビア氏だった。と  
ころがトビア氏の孫はすべて女子で、  
男子がいなかった。女性を職人に育て  
るのは、さまざまな意味で難しい時代  
だった。そこで近くに住んでいた農家  
の少年を息子のように可愛がって、技  
のすべてを教え込んだ。その少年こそ  
が、今回制作工程を披露してくれたベ  
テラン職人・アンジェリーノさんだっ  
たのだ。ロレンツォさんは「ボクの代  
まで繋がったのは、先代たちの決断  
力と、それに応えてくれた職人さん  
のお陰なのです」と、アンジェリーノ  
さんの肩に手を置いた。無口なアン  
ジェリーノさんは、照れくささを隠す  
ように、いつまでも粘土を捏ね続け  
ていた。

## インフォメーション

### ▼ 工房&ショップ

Poggi Ugo Terrecotte  
(ポッジ・ウーゴ テッレコッテ)  
Via Imprunetana per Tavarnuzze 16  
50023 IMPRUNETA (Firenze)  
[www.poggiugo.it](http://www.poggiugo.it)

### ▼ アクセス

フィレンツェ市街からCAP社のバス  
366番でFornace Poggi下車。  
所要時間は約40~50分。  
[www.acvbus.it/index.php?SEZ=9](http://www.acvbus.it/index.php?SEZ=9)

(おおや まり) コラムニスト。幼稚園教諭。総合  
商社OLを経て1996年にシエナに移り住み、同  
業の夫と共稼ぎ文筆業をスタート。新聞・雑誌・  
ニュースサイトなどに連載多数。NHK「ラジオあ  
さいちばん」の海外リポーターとしても活躍中。